

## ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

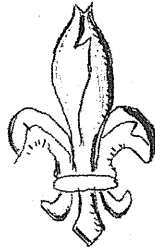
Title	「権力思想」について：G・リッターの場合
Author(s)	谷村, 操
Citation	歴研月報(22): 10-12
Issue Date	1953-11
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10109/8652">http://hdl.handle.net/10109/8652</a>
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係  
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

なかつた。ところが、この特権の擁護において、また特権をむね不逞の精神におじて、最も活発であつたのは愛護学部であるが、この愛護学部の動向はパリの例などにも見られるように、学問的にも必ずしも正統主義に満足するものではなかつたことを注意しなければならぬ。先の事件はこの意味で理解されるべきでない。中世の *libertas scholarum* — 學生の不逞、無軌道の意味する — は近代の *Academische Freiheit* を濫任的に含んでゐたに考へられるのである。(花田記)



書評

「権力思想」について

— G. リッター の場合

谷 菽 操

すでに述べた以前、われわれは二元的な國家の本質に關する考察の成果を、マイネッケの「近世史に於ける國家理性の理念」(一九二四年)に見出すことができる。云うところの「國家理性」、即ちラトスとエトス、權力衝動にもとづく行動と精神的道德的責任から出る行動との間に於ける一個の橋がそれである。しかもそれは「最高の二重性と分教とをむつ行動の格率でありながら」、「合目的であるが、有益な巨つ幸福をもたらすものである」。この「理性」の名によって示される合理的存在格のものであつた。しかしこの國家理性の存在が、怒烈なマイネッケの期待にもかゝらず、眞に生かされなかつたことは、あまり多くの人に知る通りである。

それから十余年、ナチスの政权把握にはじ

まる「ドイツの悲劇」は、かつてマイネッケが政治家に要請したクラトスとエトスの対立を未完版のまま、現実に露呈した。替へるなら G. リッターの手による「権力のデーモン」(一九四〇年)は、かつてマイネッケが十余年の首提起した二元的な「國家権力」への再考察といふことが出来る。共に両書が「抵抗史學」の名に依つて、長さ爪靈に耐えぬは存らなかつたことは「正史家は、過去を探究するとき、積極に於いて現代にむかひ合つてゐるのである」(「読者あとがき」)といふ運命を回避することなく通り来たことを示すに外ならない。古くして新しい同類、誠実な「権力思想」への対決は、ドイツ史の一面を物語る宿命的な道筋と見え思われる。以下リッターにおいて、かつて企圖された二元的な分教がいかにして統一に向つたものであるか、そのあとすじを簡略に辿つて見ることにする。勿論リッターにおいて「政治主義」と「道德主義」の対立が回避すべからざる一大前提であることは自明のことである。

先づ近代に於ける政治的思惟の発生は、盛期ルネサンスのヒューマニストの國家理論に

維持する、我の覺醒によつてのみはじまるものではなく、實は近代國家の出現をもつて始まるものであるといふのである。そして國家思想の二つの対極たるマキアウエリとモーアの政治論の展開の中に、かつて漠然としていたもの、明瞭な発見が存する。名づけてこれを「権力のデーモン」と呼ぶのである。言わば同時代に於いてすら殆ど未知のものに等しかったものを意欲の光へ高めだところに、兩者の高く評価される所以が存する。

マキアウエリの世界考察は、その内的関連に於ける正確な現実把握にはじまる。理想と現実との相剋の中にあつて、「存するべきことのために實際をなしていることを放棄する者は、自分の生活どころか、かえつて破壊を招く」。という大胆な立論、そこから出発する君主の地位保全の方法は「情勢の強制」の要求に依りて、善を行わせるために悪を行うことの結果が重大である。つまり「情勢の強制」とあらゆる政治を導く媒介物、すなわち人類の邪惡な性質こそ決定争なのである。それ故、現実の物質的權力所有なしには、また絶えざる闘争用意なしには、いかなる國家も隣國との心しめ合せの中で毅然として維

持されることができぬといふ毅然たる説を唱えたのはマキアベエリをむつて嚆矢とする。名づけて「大陸的」な権力國家思想といふ。こゝでは人間の自由愛好や道徳的潔白の要求が何らの肉心の対象ともなり得ないのである。宗教も道徳も、所詮それらは國家的存続制処置へ辱着せしめられる。

これら赤裸々な権力思想をその大陸的な性格に求めるならば、それとは別個なタイプを形成する「島國的」なものとは、一体いかにして示されるであらうか。モーアを中心課題としての「道徳主義」の展開、それこそ権力の非デーモン化に代る道徳化に外ならない。國家権力の無謀な行使、君主の罪、それらをモーアは對野に横行している社會狀態の自然な最後の結果とみるのである。畢竟は實に統治者の惡しき意中に於いてはなく、全社會の道徳狀態の中に求められなくては存らぬ。かくて最後に人類の社會態に対する治療法として政治的手段、すなわち人間の利己主義をとり除く、社會組織の技術探究が始まる。しかしそれらの技術は何処の場所にも存しなかり、たゞ「幸福な島」にだけ。かくてモーアの諦

観が生じる。しかし彼の諦めは決して完全なものではなかつた。平等で自由な正しき原則によつて統治されない隣國人に對する、ユートピア島國民の道徳的文化的優越、せめてもユートピア制度の一部はヨーロッパで模倣してほしかつた。と、モーアは嘆ずる。國家権力の横注が判決の執行としての道徳的覺醒、権力及び権力斗争の概念なしに、むだ對外政策、戦争が刑罰的正義の道具としてよりしか理解し得ないモーア、彼こそ正史の現実とは、正義がまったく明白にひとつの劇にあることはわつたに存いといふことを看破し得ないモリストの頑固さをもつものである。國民の道徳と理性とに従ふ高倫理的な価値上早、そこはあらゆる権力使用が國民の名で行われざるべし、承認される。自由に合一した國民の意志と権力利害、それはテモーンニシニマキアウエリスム的に権力使用のあらゆる汚染を覆ふ一種のウエールにすぎないのである。つまり「ユートピア」に於いてこそ、権力のデーモンは回避することのできないものなのである。

要するに近代の國家思想の方向としこの「大陸的」と「島國的」との対立は、前者における赤裸々なデーモンの承認、眞の政治斗争の回避を自然な性格の肯定と、対立する権力利害の死活向背を

法律手続へ解款し直し、斗争能力を道徳的に  
評価しようとする現実の幻想化を試みる後者  
とに區別される。つまり「政治主義」と「道  
徳主義」の対立は、政治的思惟の二つの主要  
なタイプのデーモンに対する見解の相違から  
来る対立を示していると思ふことができる。

云々までも存く、兩者の対立関係一実はそ  
の内的矛盾に於いて固く結びつくものではあ  
るが、一に対する考察がこれだけにつきるもの  
ではない、以上は莫下リッターの所論のほん  
の骨子にすぎない。だが二、ではリッターの  
デーモンに対する誠実な言葉に耳を傾けるた  
けにしたり、「それにもかゝらず、われわ  
れは、健全な、倫理的に理性的存共同体系  
を人間のむとで建設するといふ試みを、決して  
断念しなむであらう」と。二、にリッター  
の二元的存在もの、対立の克服を見出すこと  
ができる、すなわち、これらの対立は一々の  
場合、単なる合理的な公式性によつてはな  
く、「斗争を用意しているが、倫理的理性に  
よつて指導されたる権力使用」によつてはじ  
めて可能なのである。もとより二、に、か  
つてマイネッケが企図した國家理性の政治家へ  
の要請のあとすじを見出すことは至難なこと

ではない。だが二、では、結びとして、「市  
民的倫理から純然たる斗争的倫理への全民  
衆の整然たる無法な再教育によつて人間自身  
の自然な良心を益めようとする全体國家の未  
嘗有の、マキアヴェリにも知られていなか  
つた超越を論ずること下つて、読者に役立  
うとした」といふ著者の憂慮にとめら  
れしむるべき反省を輔かにかみしめるだけ  
にした。

(宮古言枝教官)



### 革命と知識人—ルーテルと ニューミニスト

島田 雄次郎

革命と知識人—この問題はこの頃しはしは  
取上げられる問題であるが、宗教改革とそれ  
に対するニューミニスト達の関係は既に早く  
この問題の一つの典型を示している。新しい  
時代の新しい知性の特長である彼等は、伝統  
的权威に対するルーテルの批判と反抗にたや

すく同感をむつた。しかし彼等は宗教改革の  
革命的進取について行けなかつた。彼等はよ  
り温和な方法による改良の道を欲したのであ  
る。当時の有名なニューミニストの一人であ  
るウオルフガング・アフリキウス・カピット  
Wolfgang Fabricius Capito) 一五  
一八年九月四日付でバーゼルからルーテルに  
宛てて書いた手紙は、このよ様なニューミニ  
スト達一般の態度を端的に示すものである。ル  
ーテルの最近の著述を読んだ彼は、先ずル  
ーテルの余りの無敵絶頂呆れる。「彼は友人  
として心腹存のだが、君の敵の極其した軍勢  
の真陰中にむきたしの身体を曝しているのを  
見てびくくりしているのだ」。そして彼は彼  
の忠言をルーテルが聞き入れてくれることを  
懇願して次のようにかいてゐる。……

「君は力を決して倒すことのできないもの  
を、徐々にほり削すことができるのだと  
いうことを信じてくれ。知つての通り君の  
敵は、すっかり防備の行つた城塔に据  
つてゐるのだ。彼等は教皇の权威と君主達  
の武力と、頑強な大學の支持の三重の安全  
性の中にゐるのだ。君はこのおそろしく大  
夫在綱を決して打破することはできない。